



手合わせ

2月13日

Sudden Fiction Project

高階 經啓
hirotakashina

2月13日のおはなし「手合わせ」

昇隆館の主だったところは前夜から夜っぴって相談していたらしく、おれたちが朝稽古に集まると、すぐさまみんな道場に集まれ、大事な話があると言い渡された。話というのは、今日から半月ほど数人の食客があるから失礼のないようにということだった。筆頭は土佐の武市さんで、あとは大石、平井といったその一党の名前としてよく耳にする者ばかりだった。失礼のないようにと言いつけておきながら、道場の偉い人がいい迷惑と思っているのはすぐにわかった。余所者にいいように振り回されるのはごめんだと思っているのだ。それはおれたちだって同じだ。

中でも武市さんに同行して、一人だけあまり聞いたことがない才谷というキザな名前の男が来ると知って、おれたちはすっかり身構えていた。腕も立つし頭も切れるとの噂だが、どうせ江戸か都で仕入れた知識をひけらかす嫌みな野郎に決まっている。聞けば下の名前は梅太郎というらしい。いかにもお勉強好きな青二才にぴったりな名前だ。そんなやつにあれこれ仕切られてたまるかっていうんだ。

ほどなく、一行が着いたというので出迎えに勢ぞろいしたが、見るとひどく緊張感のないのんびりした連中だった。武市さんだけはさすがに堂々たるもので、道場側も丁重に迎えていたが、その他は妙に緊張して偉そうに顎を上げているやつや、なめられまいとしているのか硬い表情で生真面目そうに正面をにらんでいるやつなど、どれも大したことはない。おれは一人ひとりじっくり検分しながら、思ったより御しやすいそうだと腹の内考えた。

中にひとり、きょろきょろしているのがいると思ったら、あきれたことに同郷の坂本だった。四つか五つの頃からの知り合いでどうしようもない泣き虫だったのを覚えている。剣の腕は立ったが、男のくせになよなよしていたので、おれはあまり付き合いたいとも思わなかったのを覚えている。おれが十二、三の頃、父が召し抱えられて道場ごと相模に越してきたのでその後のことは知らなかったが間違いはない。坂本だ。

するときょろきょろしていた坂本がおれを見つけて、ひどく吃驚したような顔をして、それからにやにやと相好を崩した。相変わらず軟弱なやつだ。おれの顔は苦虫をかみつぶしたようだったに違いない。兄弟子がおれを肘でつつき、こらもって愛想良くせんかと言った。坂本の方を見るとますます嬉しそうな顔になってこっちをのぞきこもうとしている。馬鹿じゃないのか。おれを目をそらした。

気が進まなかったので、宴席に出ないかという誘いは断って、裏で手伝いだけをしていた。女手も少ないので、兄弟弟子も何人か裏の方に回って来て、酒や食事を運ぶのを手伝っていたが、時々宴席の様子が漏れ聞こえてくる。聞くと才谷の評判がすこぶるいい。どういうことだと尋ねると、才谷は北辰一刀流の免許皆伝で、軍艦奉行の勝とも同等に渡り合っているのだという。本人がそんな自慢話をしているのかと聞くと、いやいや武市さんがずいぶん買っているようでしきりに宣伝しているという。

長州の桂や薩摩の大久保を引き合わせたりしたらしいと聞いて、さすがにそれは法螺話だと思ったが、座敷を出入りしている兄弟弟子はもうその才谷とやらのぞっこんのようだった。これだから男は単純で困る。ばかばかしくなっておれは濡れ縁に出て一人ぼんやり夜の庭を眺めていた。死に損なった秋の虫がちりちりと細い声で鳴いている。

「おまん、そんなところで何しゆう？」

不意に後ろから声がかかったので、慌てて立ち上がろうとするより早く男が一人隣に座った。坂本だった。

「坂本か！」

「おっと。お静ちゃん、その名は口にするといかんちゃ。坂本龍馬はここにはおらん。ここにおるんは才谷梅太郎ち男じゃき」

「才谷？ おまえが才谷なのか？」

「おうよ。それがどうした」

おれはため息をついて言った。

「まさかお前とはな。ずいぶん法螺話をふきまくっているそうじゃないか、さかも……」

「梅太郎でいい。サイタニちゅうはどうも性に合わんで」

「軍艦奉行と友だちだの、長州と薩摩の要人を引き合わせたのなんの」

「ああ」坂本は、いや梅太郎は目を細めて少し考えてから、にかっと笑った。「それよりお静ちゃんは相変わらず男に混ざって剣道しゆうか」

おれはかぶりを振った。

「腕の立つのがおらんでいかん」

「手合わせしようか」

道場に入っておれたちは手を合わせた。正直こんなに盛り上がったのは久しぶりだった。坂本改め梅太郎はべらぼうに腕が立った。押しでは返し、引いては寄せるさまは悠然とした波のようであり、それがいきなり雷（いかづち）のように炸裂する。打ち込んでも打ち込んでものらりくらしと受け身一方に見せて、不意にもう一人出てきたのかと思わせるような打ち込みをしてくる。いままで地稽古でこんなに面白かったことはない。

十本ほどとられたところで、さすがに降参した。息も切れてしまった。道具を片付けて庭先に戻る。並んで座ろうとして急に自分が汗まみれで髪振り乱しているのが気になって来た。だからおれは少々乱暴に言った。

「腕を上げたな、さか……梅太郎」

「お静ちゃんもな。乙女姉さんのほかにもこんなに強い女人がおるとはの」

「あの話もみんな本当か」

「何が？」

「勝だの桂さんだの」

「まだ早過ぎる。武市さんは喋り過ぎじゃ」

本当だったのか。おれはしげしげと、隣の梅太郎の顔を見た。確かにこれはあの幼い頃の坂本ではない。

「あの泣き虫が」

才谷梅太郎がこっちを見てにかっと笑った。おれは何だか落ち着かなくなっていて目をそらした。四つか五つころの泣き虫はそこにはおらず、天下を相手に渡り歩く才谷梅太郎がいたからだ。

「どうした」

「なんでも」

「見直したか」

「ああ」

「いや、惚れたな」

「馬鹿言え」

「26年越しの一目惚れだな」

梅太郎が言った。

「うまいこと言ってんじゃねーよ」

(「26年越しの一目惚れ」 ordered by PoorTom-san/text by TAKASHINA, Tsunehiro a.k.a.hiro)

感謝の言葉と、お願い&お誘い

Sudden Fiction Project（以下SFP）作品を読んでいただきありがとうございます。お楽しみいただけましたでしょうか？ もしも気に入っていただけたらぜひ「コメントする」のボタンをクリックして、コメントをお寄せください。ブログへの登録（無料）が必要になりますが、この機会にぜひ。

「気に入ったけどコメントを書くのは面倒だ」と言うそのあなた。それでは、ぜひ「ツイートする（Twitter）」「いいね！（Facebook）」あたりをご利用ください。あるいは、mixi、はてな等の外部連携で「気に入ったよ！」とアピールしていただくと大変ありがたいです。盛り上がります。

※星5つで、お気に入り度を示すこともできますようですが、面と向かって星をつけるのはひょっとしたら難しいかも知れませんね。すごく気に入ったら星5つつける、くらいの感じでご利用いただければ幸いです。

現在、連日作品を発表中です。2011年7月1日から2012年6月30日までの366日（2012年はうるう年）に対して、毎日「1日1篇のSFP作品がある」という状態をめざし、全作品を無料で大公開しています。→[公開中の作品一覧](#)

SFP作品は、元作品のクレジットをきちんと表記していただければ、転載や朗読などの上演、劇団の稽古場でのテキスト、舞台化や映像化などにも自由にご活用いただけます。詳しくは「[Sudden Fiction Project Guide](#)」というガイドブックにまとめておきました。使用時には、コメント欄で結構ですので一声おかけくださいね。

ちょっと楽屋話をすると、7月1日にこのプロジェクトを開始して以来、日を追うごとにつくづく思い知らされているのですが、これ、かなり大変なんです（笑）。毎日1篇、作品に手を入れてアップして、告知して、[Facebookページ](#)などに整理して……って、始める前に予想していたよりも遥かに手間がかかるんですね。みなさんからのコメント、ツイート（RT）、「いいね！」を励みにがんばっていますので、ぜひご協力お願いいたします。

読んでくださる方が増えるというのもとても嬉しい元気の素なので、気に入った作品を人に紹介して広めていただけるのも大歓迎です。上記Facebookページも、徐々に充実させてまいりますので、興味のある方はリンク先を訪れて、ページそのものに対して「いいね！」ボタンを押してご参加ください。

10月からは「1日1篇新作発表」の荒行（笑）を開始し、55作品ばかり書き上げる予定です。「[急募！お題 この秋Sudden Fiction Project開催します](#)」のコメント欄を使って、読者のみなさんからのお題を募集中です。自分の出したお題でおはなしがひとつ生まれるのって、ぼくも体験済みですが、かなり楽しいですよ！ はじめての方も、どうぞ気軽に遠慮なくご注文ください（お題は頂戴しても、お代は頂戴しないシステムでやっています。ご安心を）。

こんな調子で、2012年6月30日まで怒濤で突き進みます。他にはあんまりない、オンラインならではの風変わりな私設イベントです。ぜひ一緒に盛り上がってまいりましょう。

手合わせ

<http://p.booklog.jp/book/44275>

著者 : hirotakashina

著者プロフィール : <http://p.booklog.jp/users/hirotakashina/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/44275>

ブックログのpapier本棚へ入れる

<http://booklog.jp/puboo/book/44275>

公開中のSudden Fiction Project作品一覧

<http://p.booklog.jp/users/hirotakashina>

電子書籍プラットフォーム : ブックログのpapier (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社 : 株式会社paperboy&co.